も右眼である。この同一性はなぜなのであろう。著書の石仏を一ページづつながめて行くと興味はつきない。最後にお断りしておくが著者は私の著書を参考文献として、載せていただいているが私の名が誤っていることを著者に成り代わり訂正させていただきたい。

（奥沢　康正）

〔青娥書房、東京都千代田区九段南三―三―一二、電話〇三―三二六四―二〇二三、二〇〇二年八月、A五判、二四六頁、二〇〇〇円〕

深瀬　泰旦　著

「天然痘根絶史―近代医学勃興期の人びと―」

深瀬泰旦氏の「天然痘根絶史―近代医学勃興期の人びと―」は、氏がこれまでに諸誌に発表した二十数篇の論考に、書き下ろしの文を加えて一本に纏めたものである。最も古い論文は一九七六年に、最も新しい論考は二〇〇一年に発表されているから、二十数年間にわたる学業ということになる。この長い期間、日本における近代医学に大きな影響を及ぼし、後に東京大学医学部となった江戸のお玉ヶ池種痘所を巡る諸問題とそれと密接に関係する牛痘接種関連の問題に焦点をしぼって論文を発表し続けてこられた氏に対して、まずもって敬意を表したい。

長期間、同じテーマの研究を続けると、それが脳裏に刻み込まれることになり、活字化する際、つまり一本に纏める時、校正に支障を来すことになる。著者の脳の中を「原文」が占拠しているため、誤った文章を正しく読んでしまう。その結果誤りが看過されやすい。これは評者も幾度も経験していることである。書評は誤植などの不備を指摘することではないので詳しくは言及しないが、残念ながら諸所目につく。一例を示しておく。三六八頁の文献二十一には三ヶ所、文献二十二には二ヶ所の誤植がある。

誤植は見る人が見れば直ちに分かるので大した問題ではない。その文章を必要とする人が、誤りを訂正した上で引用すればよい。しかし事実が誤って記述されていると困る。例えば「はじめに」の第一行にあるジェンナーの種痘法発見を「一七八九年」としているが、明らかに「一七九八年」の誤りであろう。一一七頁で一七九八年としているからである。ジェンナーがセラー・ネルムズの手に発した牛痘の痘漿をジェームス・フィップスに植えたのが一七九六年、これも含めた諸実験の結果をまとめて一書として発表したのが一七九八年である。二六七頁でジェンナーは「バークレイ」の「グロースターシャー」の生まれとしているが、「グロースターシャー」の「バークレイ」が正しい。三一七頁のジェンナーの開業地は「サドベリー」でなく、「バークレイ」である。同頁の父の名は「ステファン」でなく「スティーブン」である。三二六頁、八行目の「著書」は「著者」の誤りであろう。この

ような誤りは、所謂瑕瑾とも称すべきものであろうが、有用な書であるが故に惜しい気もする。

しかし評者が最も強い関心をもったのはⅣの「医史学は閑人のものか―あとがきにかえて―」である。「スキエンティア」創刊号（二〇〇一年）に発表した論考という。この中で氏は新しい学問の誕生、古い学問の変貌、医史学教育の貧困、貧困の原因、医史学への開眼のために、教職者の影響という小見出しにわけ、わが国における医史学の貧弱な状況を嘆いておられる。その原因の一つをわが国の草創期に遡って、医学教育がオランダ、ドイツの軍医学校の影響を強く受けたものであるとしている。それもあろう。さらにこれ以外に氏が指摘する諸種の要因も評者は否定しない。しかしそれ以外に、もっと大きな原因があろうと思う。それは日本医史学会のあり方ではないかと評者は愚考している。深瀬氏自身、現に学会の常任理事の要職にあるため、このことに言及することは不可能であろうが、会員全員が深く考えなければならない深刻な問題であると考えている。否、会員が日頃からこのことを考えているが、口に出せないで、ただ黙していると思う。氏の「医史学は閑人のものか―あとがきにかえて」の中で、「自らが学ぶ学問の歴史を知らずして、その学問の正しい理解は得られない。」を二度繰り返して記しているが、多くの医師たちは「医学史を知らなくても、立派に医療を続けていますよ」と返答するに違いない。医史学の役員を含めた医史学を学ぶ人がこれにどのように答えるかが問題であろう。

日本における西洋の科学思想の受容と普及、さらに西洋医学の受容と普及に果たした影響を考慮するとき、ジェンナーの牛痘種痘法の受容と普及の問題は極めて大きく、この意味において、深瀬氏の「天然痘根絶史」はこの方面の研究において必ず参照すべき基礎的文献であることは間違いない。バイオテロリズムが社会的話題になっている現在、天然痘の恐ろしさと幕末にこの恐怖に敢然と立ち向かった医師たちのことを改めて深く考えてみる絶好の機会を提供してくれた氏に感謝したい。

（松木　明知）

〔思文閣出版、京都市左京区田中関田町二―七、電話〇七五―七五一―一七八一、二〇〇二年九月二八日、A五判、四四八頁、本体八五〇〇円〕

日本精神衛生会　編

『図説　日本の精神保健運動の歩み―精神病者慈善救治会設立一〇〇年記念―』

精神病者慈善救治会は、呉秀三の発意によって一九〇二年（明治三五年）一〇月一〇日に、医科大学教授・名流医家の夫人を中心会員として設立された。これは、精神病患者の救護、それにともなう精神衛生啓蒙を目的とした団体であって、のちには会名から「慈善」をとって精神病患者のための社会事